

水稲生育調査 部会員が試験圃を巡回

藤里稲作部会

稲作部会藤里支部（細田康成支部長）は、JAの水稲生育調査期に合わせて現地検討会を開催し、生産者や、薬剤メーカー担当者ら約40名が参加して、施肥合理化試験圃場など8試験圃を巡回しました。

同JA管内の水稲栽培では例年7月上旬を目途に中干しを行うが、今年は降雨続きで中干しが出来ない圃場が目立っていました。営農指導員の中川聡主査は「中干し後、間断灌水を長めの落水期間で行ってもらい、草丈も少ない日照時間が影響し、理想値よりも5～10センチほど長い圃場が目立つ。倒伏軽減剤の使用を進めるなど、圃場指導巡回を細目に行っていきたい。」と話します。



生育状況などを確認する部会員



真剣に競技に取り組むJA検査員

精度向上へ!米穀検査技術を研鑽

販売課

7月13日、農産物検査員資格を有する職員22名を対象とした「農産物品位鑑定研修会」を行いました。同研修会は8月27日開催予定の秋田県JA農産物検査員米穀鑑定競技会地区予選会を兼ねており、参加した農産物検査員は35点の試料を鑑定しました。

鑑定競技内容は等級判定35問、銘柄判定5問、整粒判定5問の400点満点の減点方式で競います。

参加した二ツ井営農センターの齊藤伸哉主査は「自分自身の検査精度を再認識できた。先輩検査員からアドバイスも頂き、出来秋の本番でも、検査員同志情報共有し、生産者や卸先、消費者のために正確な検査を実施したい。」と意気込みます。

CE利用者の利便性を第一に考えて

能代営農センター

7月14日にCE利用者が今秋の円滑な運営について意見交換する利用者懇談会を開催しました。

稼働初年度の稼働率は82%であったが、年々、生産者の大規模化や、「白神ねぎ」等との複合経営化が進み、CE利用者・搬入量が増加傾向。昨年は105.1%となった。

利用者により持ち込まれる生粳が最大で日量480トンを超えるなどCEの処理能力を超えてしまい、職員が深夜まで作業する日が続いていました。

営農部では、CE処理能力を超える場合には、超えた分を大潟村カントリーエレベーター公社に搬送するなどして、CE利用者の利便性を下げないための方策を協議検討中です。

※CE=カントリーエレベーター



好天が続きCE搬入が集中して、荷受を待つフレコンバック(昨年の様子)



組合員とコミュニケーションを取りながら廃プラを荷下ろす職員

農業用廃プラスチック10t回収

営農部

農家組合員の資材廃棄を手助けし、野焼きや不法投棄などの違法行為を未然に防ぐことを目的とした農業用使用済廃プラスチック回収。

能代営農センターでは、受付開始と同時に、肥料袋や古くなった水稲用の苗箱、育苗用ハウスに使った農業用ビニール資材を積み込んだ軽トラックなどが、センター敷地に数十台列を作るほどの大盛況。職員は「これから暑くなるから熱中症に気を付けてね。」などと声をかけながら、農作業の進捗状況を確認するなどコミュニケーションを取っていました。

管内3地区の営農センターには廃プラスチック合計で約10トンが集まり、農家組合員87名が利用。次回は11月を予定しています。